

脚光を浴びる研究・開発

科学技術の研究・開発は企業にとっても国家にとっても今や最重要事項となってきた。合併して太平洋セメントとなる前の秩父セメントの頃、私も新規事業分野を開拓せねばならぬと考えて、セラミックスやバイオについて研究を進めさせた。しかし10年程かけて結局成果を得ることができなかった。中途半端な及び腰の姿勢で人任せにしていたのでは失敗するのが当たり前と、後で臍を噛んだのである。



アメリカのGEのウェルテ会長の履歴書を読むと、GEは常に成長分野を求め、しかもシェアが1位か2位になる自信がなければ手掛けないとあった。日本では業界のライバル会社が新しいプロジェクトを立ち上げたり、新製品を出したりすると、社内の検討の末お蔵入りしていた案件であっても取り出して、ひとまずスタートさせる。万一相手が成功し自社が手を付けていないと、両者の格差が広がる。もし両者共失敗すればおあいこだという考えであろう。こうして過当競争の挙句誰も利益を得られない。このようなことを繰り返しては企業も国家も成長力は得られない。

それでも高度成長が続けられたのは、輸出産業が海外企業と猛烈な競争を続けて、それぞれ独自の強味を生かして来たからである。

業界1、2位のシェアを維持する強味となると、それが技術力であれ、事業のコンセプトやシステムであれ、販売力であれ半端なものではない。しかもそれを常に研ぎすまし、磨き上げて他社に追いつかれぬようにせねばならぬ。もし他社に抜かれれば潔くその事業を捨てて、次の新しい事業にかかる。

研究開発といっても漫然と自分の好みでやっていると、結局世の中の役に立たぬ。

脚光を浴びる程、この仕事は厳しいものとなる。しかしこれなしに企業も国家も将来の発展はできないのである。

理事 諸 井 虔
(太平洋セメント株式会社 相談役)